



オンラインでもアンケートのご回答が可能です。
左記QRコードよりご利用ください。

お客様へのお願い



客席内での写真撮影・録音・録画は、固くお断りいたします。



着信音・アラーム音は公演の妨げとなりますので、携帯電話・アラーム付き腕時計をお持ちのお客様は、マナーモードに設定の上、電源をお切りください。



- 館内ではマスクの着用をお願いいたします。なお、関係スタッフもマスクやフェイスシールド等を着用しておりますのでご了承ください。
- 咳エチケットやこまめな手洗い、手指消毒など、感染症予防対策の励行をお願いいたします。
- 人と人との距離を最低1m空けるよう努め、ソーシャル・ディスタンスの確保にご協力ください。
- 大きな声での会話、演奏者への声援はお控えください。
- 楽屋口での出待ち、面会等をご遠慮ください。

企画制作：東京文化会館

館長：日枝 久
音楽監督：小林研一郎
副館長：林 久美子
事業企画課長：梶 奈生子
制作：佐藤さやか、高橋かほり、吉村朱音
広報：船川満理、佐藤健太郎、里神大輔、深谷多恵、緒方 愛、安田ふき子、岡 伊陽子

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

東京文化会館オフィシャル・プラチナパートナー：五野精養軒

Production: Tokyo Bunka Kaikan

President: HIEDA Hisashi
Music Director: KOBAYASHI Ken-ichiro
Managing Director: HAYASHI Kumiko
Director of Planning and Production Division: KAJI Naoko
Production Team: SATO Sayaka, TAKAHASHI Kahori, YOSHIMURA Akane
Public Relations: FUNAKAWA Mari, SATO Kentaro, SATOGAMI Daisuke, FUKATANI Tae, OGATA Ai, YASUDA Fukiko, OKA Iyoko

Organizer: Tokyo Bunka Kaikan operated by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Supported by: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

Tokyo Bunka Kaikan Official Platinum Partner: Ueno Seiyoken



リートの傑作、歌劇仕立て

歌劇 *Operatic Performance: Wolf's Italienisches Liederbuch*
ヴォルフイタリア歌曲集

2020年11月28日(土) 15:00開演 東京文化会館 小ホール
Sat, November 28, 2020 15:00 Tokyo Bunka Kaikan Recital Hall

歌劇 ヴォルフイタリア歌曲集

Operatic Performance: Wolf's Italienisches Liederbuch

全1幕／原語(ドイツ語)上演 日本語字幕付

Opera in One Act/Sung in German with Japanese surtitles

作曲 ◆ フーゴー・ヴォルフ

Music: Hugo WOLF

演出・構成 ◆ 岩田達宗

Direction and Creation: IWATA Tatsuji

出演 Artists

ソプラノ ◆ 老田裕子

Soprano: OITA Yuko

バリトン ◆ 小森輝彦

Baritone: KOMORI Teruhiko

ピアノ ◆ 井出徳彦

Piano: IDE Norihiko

ダンス ◆ 山本 裕 船木こころ

Dance: YAMAMOTO Yu, FUNAKI Kokoro

スタッフ Creators

美術 ◆ 松生絃子

Stage design: MATSUO Hiroko

衣裳 ◆ 前田文子

Costume design: MAEDA Ayako

照明 ◆ 大島祐夫

[アート・ステージライティング・グループ]

Lighting design: OSHIMA Masao [Art Stage Lighting Group]

振付 ◆ 山本 裕

Choreography: YAMAMOTO Yu

舞台監督 ◆ 大仁田雅彦 [ザ・スタッフ]

Stage manager: ONITA Masahiko [The Staff]

演出助手 ◆ 古川真紀

Assistant director: FURUKAWA Maki

舞台監督助手 ◆ 斉藤美穂、田中美賀子、平井利典、松田奈菜枝 [ザ・スタッフ]

Assistant stage managers:

SAITO Miho, TANAKA Mikako, HIRAI Toshinori, MATSUDA Nanae [The Staff]

字幕 ◆ 近野賢一、老田裕子、岩田達宗

Surtitles: KONNO Kenichi, OITA Yuko, IWATA Tatsuji

大道具 ◆ 東宝舞台

Scenery: Toho Stage Craft

小道具 ◆ ザ・スタッフ (みはらのりこ、田中愛永)

Properties: The Staff [MIHARA Noriko, TANAKA Manae]

衣裳製作・ワードローブ ◆ 東京衣裳

Costumes and Wardrobe: Tokyo Costume

ヘア&メイク ◆ 丸善

Hair & Makeup: Maruzen

照明操作 ◆ アート・ステージライティング・グループ

Lighting: Art Stage Lighting Group

字幕操作 ◆ アルゴン社

Surtitles operation: ARGON SHA

演出ノート

岩田達宗

私はオペラの演出家だ。そして日本人だ。だからなぜ日本人である私が、日本でオペラの舞台をお客様に届けようとするのか。そこに何の意味があるのか？つまり、オペラとは何なのか？馬鹿な頭で問い続けながらずっと生きてきた。

ヴォルフの「イタリア歌曲集」と出会ったのは随分と昔のことだが、一撃で魅了された。そして直感的にこれは、と思い、密かに舞台にする夢を温め続けた。何故なのか、その理由は初めはぼんやりとしていたが、長い時間をかけて付き合っているうちにハッキリとした。その序曲ともいべき第一曲の冒頭「Auch kleine Dinge können uns entzücken 小さなものもまた、私たちを本当に魅了できるのだ」というこの曲全体を集約するようなフレーズにその理由が集約されていることに気付いた。

私にとって現在におけるオペラとは、テクノロジーに頼ることなく人間の肉体によって生まれ出ることばを紡ぐ芸術、のことだ。私は極小の環境の中にこそ、現在のオペラの可能性のひとつがあると思っている。

19世紀、オペラは市民による都市社会が成長し巨大化していくシンボルだった。ヴォルフの歌う「kleine Dinge 小さなもの」は当時のオペラではないもの、その真逆の何か、例えばリートや歌曲を指すことばだったろう。しかし、現在の我々にとってのオペラの新しい可能性は、皮肉なことに、小さくなることにこそあるように私は思う。

21世紀の現在、経済は永遠に成長するというお伽話の支配する社会の中を我々は生きている。あるいは成長し続けなければいけないという強迫観念の中で我々は生きている。成長する。それはつまり、肥大化する、巨大化すること、だ。そんなことを続けていればいつか悲惨な破綻が起きることを理解している。あるいは感じている。でも、その中で生きる我々はこの社会の車輪が回り続けるのを止められない。いや、止められなかった。

つい一年前までは。

しかし、2020年の今年、新型コロナウイルスcovid-19によって世界が大きな変貌と危機に迫られた。そのために、世界中で社会の動きは止まった。動き続け、成長し、膨らみ続けなければならないはずの人類の社会は遂に一旦停止したのだ。2020年は歴史に刻まれ、人類の記憶に長く残ることだろう。「目に見えない小さなもの」が、巨大に膨れ上がり、まだ膨らみ続けようとして回り続ける世界の車輪の回転にストップをかけた年として。

この舞台の企画は、2020年がそんなことになるとは夢にも思っていない時に、ささやかに始まった。莫大な資本や人員を動かしての巨大な企画ではない、小さな小さなこのプロダクションは、おかげさまで感染症防止の影響を殆ど受けることもなく、静かに長い時間をかけてゆっくりと進行し、熟成され、今日の本番を迎える。

小さなものは、しぶといのだ、私はそう感じる。小さなもの、あるいは小さくなることの中にこそ、新しい人間の生き方の可能性があるように思える。



イタリア歌曲集

Italienisches Liederbuch

作曲：フーゴー・ヴォルフ

Music: Hugo WOLF

作詞：パウル・ハイゼ、不詳

Lyrics: Paul HEYSE after anonymous

訳詞：近野賢一、老田裕子、岩田達宗

Japanese translation: KONNO Kenichi, OITA Yuko, IWATA Tatsuji

- | | |
|---|---|
| 1. 小さくてもうっとりさせるものはあるし (B)
<i>Auch kleine Dinge (I)</i> | 14. あの人が月明かりの中 窓の下で歌っている (S)
<i>Mein Liebster singt am Haus (XX)</i> |
| 2. もう、ずっと長い間待ち焦がれてきたのよ (S)
<i>Wie lange schon (XI)</i> | 15. セレナーデを奏でに参上しました (B)
<i>Ein Ständchen Euch zu bringen (XXII)</i> |
| 3. 月は溜まりに溜まったある鬱憤を (B)
<i>Der Mond hat eine schwere Klag' erhoben (VII)</i> | 16. みんな言ってるわよ (S)
あなたのお母さんが反対してる、って
<i>Man sagt mir, deine Mutter (XXI)</i> |
| 4. もう涙にくれるのはたくさん (S)
<i>Ich esse nun mein Brot (XXIV)</i> | 17. 兄弟 世を捨てて坊主にでもなるか (B)
<i>Geselle, woll'n wir uns in Kutten hüllen (XIV)</i> |
| 5. きみの恋人が死んでしまうのを見たいなら (B)
<i>Und willst du deinen Liebsten sterben sehen (XVII)</i> | 18. たった一本の細い糸であたしを捕まえて (S)
<i>Du denkst mit einem Fädchen (X)</i> |
| 6. あなたがどんなにステキな人か、 (S)
よく分かっている
<i>Wohl kenn ich Euren Stand (XXIX)</i> | 19. お前のせいで 大変な時間を無駄にした! (B)
<i>Wie viele Zeit verlor ich (XXXVII)</i> |
| 7. ベッドに倒れこんで疲れた手足をのばしても (B)
<i>Schon streckt' ich aus im Bett (XXVII)</i> | 20. 彼があたしを食事に招待してくれた (S)
<i>Mein Liebster hat zu Tische (XXV)</i> |
| 8. ああ、あなたのお家が (S)
ガラスのように透けて見えたなら
<i>O wär' dein Haus (XL)</i> | 21. きみの魅力を完璧に絵に描けるなら (B)
<i>Dass doch gemalt (IX)</i> |
| 9. 貴女こそこの世界で最高に美しいもの (B)
<i>Ihr seid die Allerschönste (III)</i> | 22. もういや あなた ホントにいい加減にして (S)
<i>Nein, junger Herr (XII)</i> |
| 10. 緑色ってステキ 緑色を着ている人も (S)
<i>Gesegnet sei das Grün (XXXIX)</i> | 23. 美しいブロンドのきみ 顔を見せて (B)
<i>Heb auf dein blondes Haupt (XVIII)</i> |
| 11. 祝福あれ この世界の創造主よ (B)
<i>Gesegnet sei, durch den die Welt (IV)</i> | 24. あたしの恋人はとっても小さいの (S)
だってかがまなくても
<i>Mein liebster ist so klein (XV)</i> |
| 12. ゆうべ 真夜中に気がつくとき (S)
<i>Heut' Nacht erhob ich mich (XLI)</i> | 25. 天上のお母さまに祝福あれ (B)
<i>Benedeit die sel'ge Mutter (XXXV)</i> |
| 13. 目の見えないひとは幸いだ (B)
<i>Selig ihr Blinden (V)</i> | 26. 誰があんたを呼んだの? (S)
誰があんたにこい、って言ったの?
<i>Wer rief dich denn (VI)</i> |

イタリアのとある町で、思春期の夢見がちな少女と不器用な少年が出会い、恋に落ちる。
これは、若い二人のささやかな愛を46篇の詩で紡いだ小さな物語。

～ 休憩 ～ intermission

- | | |
|--|---|
| 27. 陽気に笑ってなんかいられるかよ (B)
<i>Wie soll ich fröhlich sein (XXXI)</i> | 37. さあもう仲直りしよう (B)
僕のいのちより愛するひとよ
<i>Nun lass uns Frieden schliessen (VIII)</i> |
| 28. 何を怒ってるの あなたそんなにかっかと (S)
<i>Was soll der Zorn, mein Schatz (XXXII)</i> | 38. しょっちゅう噂で聞いたわよ (S)
<i>Ich liess mir sagen (XXVI)</i> |
| 29. 放っておこう、あんな鼻持ちならない女 (B)
<i>Lass sie nur geh'n (XXX)</i> | 39. どんな歌をきみにうたってあげればいだろう (B)
<i>Was für ein Lied soll dir gesungen werden? (XXIII)</i> |
| 30. 侯爵夫人じゃあるまいし って (S)
あなたはあたしに言うけど
<i>Du sagst mir, dass ich keine Fürstin (XXVIII)</i> | 40. 戦場に向かう若者のみなさん (S)
<i>Ihr jungen Leute (XVI)</i> |
| 31. もうこれ以上歌えない だって風が (B)
<i>Nicht länger kann ich singen (XLII)</i> | 41. そして朝早く貴女はベッドから起きだすと (B)
<i>Und steht Ihr früh am Morgen auf (XXXIV)</i> |
| 32. ちょっと黙ってくれる? (S)
そこの不愉快な騒音をたててるあなた
<i>Schweig einmal still (XLIII)</i> | 42. あなたは遠くへ旅立ってしまうのね (S)
<i>Mir ward gesagt (II)</i> |
| 33. ああ知っているかい (B)
僕がどれだけ お前を思って
<i>O wüßtest du, wie viel ich deinetwegen (XLIV)</i> | 43. ぼくが死んだら 体を花で覆ってくれ (B)
<i>Sterb' ich, so hüllt in Blumen (XXXIII)</i> |
| 34. 地の底にあいつの家が飲み込まれればいい (S)
<i>Verschling' der Abgrund (XLV)</i> | 44. もしもあなたが天国に昇ってしまうなら (S)
<i>Wenn du, mein Liebster (XXXVI)</i> |
| 35. お高くとまりやがって このお嬢さま (B)
<i>Hoffärtig seid Ihr, schönes Kind (XIII)</i> | 45. きみがぼくを見て ほほえみ (B)
<i>Wenn du mich mit den Augen (XXXVIII)</i> |
| 36. ふたりとも ずっと黙ったままでした (S)
<i>Wir haben beide lange Zeit geschwiegen (XIX)</i> | 46. ペンナにわたしの恋人がいるの (S)
<i>Ich hab in Penna einen Liebsten (XLVI)</i> |

※ () カッコ内のローマ数字は、歌曲集上の演奏番号です。
※ The roman numerals enclosed in brackets are the actual order in the songbook.

(S) : Soprano (ソプラノ) (B) : Baritone (バリトン)

プロフィール Profiles



岩田達宗

IWATA Tatsuji,
Direction and Creation

演出・構成

©大阪音楽大学

東京外国語大学フランス語学科卒業。1991年より栗山昌良氏に演出助手として師事。96年五島記念文化賞オペラ新人賞を受賞。オペラ演出家として全国のオペラ・プロダクションで作品を発表し、高い評価を得る。2003年プッチーニ作曲『三部作』、05年プーランク作曲『カルメル会修道女の対話』では、音楽クリティック・クラブ賞、大阪府舞台芸術賞を受賞。05年新実徳英作曲『白鳥』、12年『白虎』、14年『黄金の国』は佐川吉男音楽賞を受賞。08年『ファルスタッフ』は三菱UFJ信託音楽賞を受賞。11年プリテン作曲『ねじの回転』は文化庁芸術祭大賞に選ばれた。06年には自身が音楽クリティック・クラブ賞を受賞。大阪音楽大学客員教授。ひろしまオペララネッサンス芸術監督。



小森輝彦

KOMORI Teruhiko,
Bariotone

バリトン

東京藝術大学卒業。同大学院、文化庁オペラ研修所修了。文化庁在外研修員としてベルリン芸術大学に学ぶ。1999年プラハ国立劇場『椿姫』ジェルモンで欧州デビュー。独アルテンブルク・ゲラ市立劇場専属第一バリトンとして『ドン・ジョヴァンニ』『さまよえるオランダ人』のタイトルロール等の大役を多数演じ12年間同劇場を牽引するとともに欧州各地で活躍。その業績により2011年に日本人初のドイツ宮廷歌手の称号を授与された。またザルツブルク音楽祭『午後の曳航』、ミラノ・トリノ音楽祭『班女』等にも出演。国内では新国立劇場をはじめ数々の舞台上で活躍。東京音楽大学教授。二期会会員



山本 裕

YAMAMOTO Yu,
Dance and Choreography

ダンス・振付

現代舞踊協会制定新人賞、ダンスプラン賞、埼玉全国舞踊コンクール第1位、チェコのNew Prague Dance Festivalにてダンスシアター賞など多数受賞。文化庁新進芸術家海外研修員制度でオランダのスカピーノバレエ団に1年間留学。ヨーロッパやアジアのフェスティバルより招待されると共に国内では瀬戸内国際芸術祭、六本木アートナイト、都民芸術フェスティバルなどの振付家に選出。ジャパン・オペラ・フェスティヴァル『椿姫』の振付を担当しポローニャフィルハーモニーと共演。世界的アーティスト“AmPm”のMVにソロ出演するなど幅広い活躍を見せている。2019年オン・ステージ新聞の新人振付家ベストに選出。



老田裕子

OITA Yuko,
Soprano

ソプラノ

神戸市出身、大阪音楽大学大学院修了。透明感のあるあたたかい声と自由な技巧でオペラ『フィガロの結婚』『魔笛』『コジ・ファン・トゥッテ』『ドン・ジョヴァンニ』『清教徒』『椿姫』『ランスへの旅』『カーリユー・リヴァー』などの主要な役を演唱。また宗教曲のソリストとして多数活躍している。第73回日本音楽コンクール歌曲部門入選、飯塚新人音楽コンクール第1位、第9回松方ホール音楽賞大賞。リサイタルの成果により平成17年度音楽クリティック・クラブ奨励賞、19年度神戸市文化奨励賞、22年度兵庫県芸術文化奨励賞、24年度文化庁芸術祭音楽部門新人賞を受賞。現在、同志社女子大学、武庫川女子大学、大阪音楽大学各非常勤講師。関西二期会会員



井出徳彦

IDE Norihiko,
Piano

ピアノ

静岡県出身。中国西安音楽大学で行われた演奏会にて伴奏者を務めた事により、伴奏への強い興味を覚える。2006年にオーストリアへ渡り、ウィーン国立音楽大学歌曲伴奏科にて研鑽を積む。12年夏に帰国。帰国後は伴奏者として、北九州国際音楽祭ドイツ歌曲サロンコンサートや桐朋学園ファカルティコンサート、日本R.シュトラウス協会主催の歌曲例会など多数のリート演奏会に出演している。その他には「アンサンブルLust」を結成し、ドイツ歌曲の演奏会に、日本語の朗読を加えた公演を企画。また、モンゴル民族楽器馬頭琴の数少ない伴奏者としても活動している。



船木こころ

FUNAKI Kokoro,
Dance

ダンス

現代舞踊協会制定新人賞、全国舞踊コンクール第1位他多数受賞。文化庁新進芸術家海外研修員（オランダ）。新国立劇場主催公演に於いて主演を務めるなど、多彩な国内外の振付家のもとソリストダンサーとして出演する他、文化庁主催事業などで振付作品を発表している。海外に於いてもアートギャラリーやフェスティバルでソロ作品を上演。B'z稲葉浩志『Oh my love』、カノエラナ『セミ』MVメインソロダンサー、ボルノグラフィティ『フラワー』ジャケット写真モデル、富士フィルム化粧品「ASTALIFT」PV出演など活動の場を広げている。

楽 曲 解 説

広瀬大介(音楽学、音楽評論)

現代において、「無頼派」などという言葉はもう絶滅危惧種だろうか。音楽史における「無頼派」として真っ先に思い浮かぶのは、やはりフーゴー・ヴォルフ（1860-1903）であろう。音楽の世界は、楽器の習得、作曲の規則、なにかと学ばねばならぬことが多く、型にはまらない「無頼派」が生まれづらくはあるが、ヴォルフはまさに、そんな人物のひとりだった。

ウィーン音楽院でも、当然のごとく劣等生。1877年（17歳）には退学処分を喰らってしまう。作曲家としては一顧だにされず、演奏家として食べていくだけの技倆も持ち合わせていないヴォルフは、まず音楽評論家としてデビューし、なにものにも遠慮しない辛辣な批評を書き連ね、いくばくかの名声（とそれよりも遙かに大きな同業者からの敵意）を得ることになる。

ドイツ歌曲（リート）の世界は、シューベルトの尽力によって一気に花開いた。そもそも、ただの「うた」を意味するドイツ語の「リート Lied」は、それまでは素朴な民謡を含む、一般名詞的な意味合いを含むものでしかなかった。シューベルトは素朴な歌（有節歌曲）の世界と、ロマン派の時代を経て高度に発展した詩の表出力をそのまま描くような音楽（通作歌曲）の世界を巧みに結び合わせ、芸術性を高めた「リート」の世界を築き上げている。

その後もシューマンなどが大切に受け継いできた「リート」の伝統を引き継ぐように、ヴォルフが、名作「リート」の数々を紡いだのは、1887年からの10年ほど。その類い希なる才能を見抜いた数少ない友人たちが設立したヴォルフ協会による経済的支援（住居含む）によって、成し遂げたものだった。それでも作品が世間に受け容れられないことに業を煮やし、精魂を込めて作曲したオペラ『お代官様』の上演拒否に至って、ついに精神の平衡を失ってしまう。5年ほどを精神病院で過ごし、1903年に死去。享年43。

ヴォルフは自作の歌曲を人前で披露するとき、まずそれを朗読し、内容を聴き手に理解させてから演奏に取りかかるのが常だったという。詩人の描く世界を一幅の絵として捉え、それを提示してみせるヴォルフの手腕は、どの曲を聴いても水際だっている。世の中の権威という権威に楯突いたヴォルフにも、無条件に崇めたものはいくつかあった。そのうちのひとつが、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ、エドゥアルト・メーリケといった、超一流の大詩人たちであった。歌曲を作るにあたり、ヴォルフは真っ正面からこの大詩人と立ち向かってきた。

ゲーテやメーリケに比べれば知名度は劣るかもしれないが、同時代の文学者パウル・フォン・ハイゼ（1830-1914）にもヴォルフは相応の敬意を払っていた。ハイゼは折々に、イタリア文学のドイツ語翻訳者・紹介者としても活躍を続けており、イタリアの最先端の文学をドイツ語圏に紹介している。イタリアに生きるひとたちの息吹がそのまま伝わってくるような現地の民謡をドイツ語に訳すことも、ハイゼのライフワークのひとつであった。ヴォルフが『イタリア歌曲集』として付曲したのは、このハイゼのドイツ語訳に対してである。人間の深層心理を克明に描写することをもっとも得意としたヴォルフは、そのような「イタリアに生きるひとたちの息吹」を感じられるようなハイゼの訳にこそ、大きな魅力を感じたのであろう。

『イタリア歌曲集』の第一部（22曲）は1890/91年、第二部（24曲）は1896年と、作曲の時期はかけ離れているが、これは自身の才能に疑いを抱いたヴォルフが（鬱病も相まって）ほとんど作曲を進めることができなかったことによる。ただ、とくに第二部はわずか1ヶ月で作曲されていることを見れば、この世界に作曲家が魅了されていたことは明瞭だろう。歌の性格は、最愛のひとの愛と美しさを讃えるもの、あざけりや喧嘩の歌、愛の苦しみ、愛を捨てたことに対する後悔など、主に男女の機微を描くものに終始する。1時間半はかかる全曲が実演で披露されることは稀であるが、今回はこの作品に通底する「ドラマ」を抽出するかたちで、曲順を変え、演出を付すかたちで「上演」される、という貴重な機会を経験できる。